
貴方と同じ気持ちです

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方と同じ気持ちです

【Nコード】

N1698BA

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

一瞬を切り取ってミルフィーユのように重ねた。

この瞬間が永遠に続けばいいと願って。

死にゆく少女と彼女を愛した少年の、幾重にも切り取られた最期の瞬間。

*サイト掲載済み

01・おいらにみたもの(前書き)

http://loca.soragoto.net/index.
html

お題お借りしました。

01・さいごにみたもの

ポロポロ

ポロポロ

零れるそれが透明であること・・・不思議でたまらなかった。それを零した君の目は、何よりも紅く、美しく。私の世界の中で、一番綺麗だったから。

綺麗なものは、ひんやりとした冷たい印象。優しいものは、ほんわかとした暖かい印象。

だけど誰よりも優しかった君は、私の世界で一番綺麗だったから。

私はその紅い色に、恋をした。

誰よりも優しい、君に恋をした。

ポロポロ ポタポタ はら はら

絶え間なくそれが零れるこの時間が、私にはまるで永遠のように感じた。

君といる時間はいつもあつという間に過ぎてしまつて、それでも永遠のように満ち足りていて。

君の言葉だけが凍りついた私の心を溶かし、癒した。

君から零れたそれが、私の頬に、落ちる。
冷たくて、冷たい。

優しく暖かい君から零れた、綺麗で冷たいそれ。

綺麗な君が好きだったけど、冷たいそれだけは見たくなかったのに。

掠れそうになる声を、がんばって音にする。

ああ・・・声を音にすることって、こんなに大変だったっけ？

「ねえ・・・笑 って？」

透明な君の涙が、私の頬にまた堕ちた。

02・さいじつにおもったこと

ポタポタ　ポタポタ

君の頬に、俺の服に、君の髪に、墮ちるそれ。
優しいぬくもりも暖かな色も持たない、それ。
俺の服に黒い染みを作り、俺の心を悲しい色に染め上げ、大好きな君を苦笑させる、それ。

ねえ、ねえ。

笑って、だなんて。誰が泣かせたと思ってるの？

男なのに、とか。

人がいっぱいいるのに、とか。

そんなこと全部全部どうでもよくって、ただただ俺の目から、それは零れ続けた。

嘘つき　とか、約束したのに　とか、言いたいことはいっぱいあったはずなのに、俺から零れるのは無色透明のそれだけだった。

約束の日になったら、君としたいこと、君に言いたいことがいっぱいあった。

君が黙っていなくなったとき俺がどんな気持ちになったかと、責めて。

それでも約束守ってくれるって信じてたと、笑って。
これからは一緒にいられるんだって、泣き虫な君を抱きしめて。

それなのに君は、俺に何一つさせてくれないんだね。

「ねえ、なんで君は俺をかばったの？」

君の答え、聞く必要もなかった。

こんな状態の君に、聞けるはずもなかった。

それでも君の最期に、俺が思ったこと。

03・せいじじいったばじょ

走る、走る、はしる。

この足がもっと早く動いてくれないのが、私は怖くて仕方がなかった。

間に合わなかったらと、怖くて仕方がなかった。

あの人が恐ろしい人だっこと、私は身を持って知っていたから。必要に駆られた場合にあの人が君を殺すくらい、簡単にやってしまえるだろうと私はわかっていたから。

ねえ、何でこの足はもっと早く動いてくれないの？

何で、何で、なんで。

問いかけても答えはない。

当たり前だ、私は今走るのだけで精一杯で、言葉を声に行っている暇なんてないのだから。

キヨロキヨロとせわしなく、あたりを見渡していた君が振り返る。

私を視界に入れた君は、ぱっと花咲くように、笑う。

それを見るのが、私は何よりも好きで仕方がなかった。

だけどそんな君の背後に、きらりと光る鋭いものを持った人が近づ

くのを見て、私は慌てて君を突き飛ばす勢いで、君の胸へと飛び込んだ。

「危ない・・・っ！」

君の腕の中はいつだって暖かく幸せで、そのぬくもりを味わえなくなるのが悲しくて仕方なかった。

04・さいごについたつそ

周りの音が聞こえなくて、君が絶え絶えに紡ぐ言葉だけがやけに大きく聞こえた。

昔から俺の耳は君の声ばかり完璧に拾い、だけど他の音を拾わないなんてこと、決してなかったのに。

まるでこれが最後だとしても言うように・・・俺の名を呼ぶ君の声が。危ないと叫んだ君の声が。笑ってと望んだ君の声が。

何度も何度も、俺の頭の中で、耳の奥で繰り返し響いた。

だから・・・なんだろう？
俺の目は壊れたおもちゃのようにひっきりなしに涙を零し続け、だけれどその理由はわかりきっていた。

もともと低めの体温しか持ち合わせていない君の身体から、静かにぬくもりが失われていく。
暖かな紅あかとは対照的な色しか持ち合わせていないはずの君から、そのうちに隠された紅あかが失われていく。

「ごめんね。」

泣き続ける俺に、君がついた最期の嘘。

君は君のせいで俺が泣いたことに謝ってくれたけど、

君が俺の身代わりになったこと、悪いだなんて思っていないでしょう？

05・さうじつだったよな

まぶたが、重たくなっていった。

身体も、動かせなくなっていた。

君は泣いてるばかりだし、私が君にひどいことを言っているのもわかっていた。

笑って、だなんて。

私が君の立場だったら、絶対笑顔なんて作れない。

それでも君は優しい人だったから。

残酷なほどに、優しい人だったから。

言葉を出すのも億劫で、それでも君を見ていたくて。

だけど君は泣いていて。

黙っていなくなっごめんね、とか。

だけどそれにも理由があったんだ、とか。

も一度君の隣にいたい、とか。

たくさんたくさん伝えたいことがあった。

素直になれない私だけど、いっぱいいっぱい素直になって、君に伝えたいことがあった。

だけど私の体からは私が大好きだった君の目と近い色のものが絶え間なく流れ落ちており、私に紡げる言葉の数は限られていた。

だから、だから。

「ずっと、愛してるよ。」

初めて出逢ったときから変わらなかったこの気持ちを、最期に。

06・さいごにかんじたかんじよく

あまり見た覚えのない、君の苦笑が切なくて。

そっけなくて、ぶっきらぼうで、素直じゃない君はあまり笑わなかった。

片や俺はいつも笑顔だと称されるくらいに笑っている子供だった。

だからこそ君は、愛想笑いすらしない。

気に入らないことがあったらはっきり言うし、たまに笑顔を浮かべる時は本当に幸せそうに笑っていて。

だけど素直に、好意を表せない人だった。

俺が君の期待に答えられないせいで、君が、困ったように、笑う。

必要なときには、必要な笑みを。

必要なときには、必要な言葉を。

確かに俺は、そうやって、そうできて生きてきたはずなのに。

何よりも大切な、大好きな君の望みを、俺は今、叶えることができないでいる。

愛してる、って素直じゃない君が言う。

笑って、と素直じゃない君が望む。

嬉しくないときも楽しくないときも笑ってこれた俺は、笑えないでいる。

泣き虫で意地っ張りな君は困ったように笑い、いつも笑顔だった俺は絶え間なく涙を零す。

君の涙を拭くのは、俺の役目だったのに。

泣いている君を隠す場所は、俺の胸の中だけだったのに。

「何で、なん で。」

零れた言葉は意味なんてなくて、君は困ったようにしか笑ってくれなくって、俺は泣くことしかできなくって。

俺の頬を撫ぜる、俺の涙を拭う。

そんな君の優しい手の感触が、悲しくて仕方がなかった。

07・さいじにきいたおと

ポタポタ

墮ちる涙は絶え間なく。

君にそんなものは似合わないと思いつつも、それを止めるすべなんて私は持ち合わせていない。

笑ってほしいと望んでも、泣かせているのは笑顔を望んだ私だった。

重たい身体を・・・手を持ち上げて、君の白い頬を滑る滴を拭う。
昔とまるつきり逆だと思い、少し楽しくなるけれど、泣いている君を前になんて、とてもじゃないけど笑えない。

悲しいね、悲しいね。

だけど一緒に、泣く気にもならない。
きつと正しくは、泣く気力も残ってない。

今だって私の体からは、絶え間なく紅い液体が零れていて。

傷口に触れた覚えはないのに、私の手には紅いそれが付着していて、
重たい手を動かして君の涙を拭うたび、それは君の頬に紅い線走走らせる。

私の体から零れ落ちた紅いものが、君の目から零れ落ちた透明なものと、混ざる。

その近くにある君の目はいつもと同じ色をしていて、私の体から零れ落ちた紅は薄くなっても、君の紅だけは変わらず美しかった。

「やだ、いやだよ。」

私よりずっと大きな君が、以前と変わらないぬくもりを持って私を抱きしめる。

優しい君の心臓の音を聞いているこの瞬間が、私にとって何にも変えがたい瞬間だった。

08・さいごにかいたてがみ

君が、涙を零す。

零れ続けるそれを右手で拭っていたときに、左手に何かが触れていることに気づいた。
もったいないと思いつつも、気になってしまったので残された貴重な時間の中で、僅かに君から視線を逸らす。

私にあたり、はじける涙。

右手が触れる、君の滑らかな頬の感触。
ろくに力の入らない私を支える、君の腕。

そのどれよりも硬い、ひんやりとしたそれを見て、私はなんだか嬉しくなった。

やけに重たい自分の手を動かして、それを、握る。
ゆっくりと、ただど確実にそれを動かし、君に見せる。

泣き続ける君は、泣きながらも怪訝な顔をして、なんだかそれが面白かった。

「ラブレター、だよ。」

誰にも同じように優しくできた、残酷なほどに優しい君に。

私がどれだけ君を愛していたか、思い知るといいよ。

09・やいじやりのじつたじつ

本当の私がひどく夢見がちな少女だったと、誰が知っていただろう。

少なくとも私のたった一つの夢を私を知る多くの人が聞いたら、鼻で笑うだろう。

ただ言葉にするまでもなく、きっと私の夢に君は気づいていて、それを叶えようとしてくれた。

ポタポタ落ちる涙と、それよりも遙かにたくさん零れた紅いもののせいで、その夢は叶わなくなってしまったけど。

それでもこうなってしまったことを、悪かったと思っていない私が一番悪い。

よかったとも、思っていないけど。

私の目の前で泣き続ける君は、幼い頃からなんら変わらない。
優しく暖かくて、綺麗。

そんな君の笑顔が大好きで、大嫌いで、誰よりも愛しかった。

だからこそ、君に涙は似合わないと思う。

そんなこと、泣かせた私が言えるはずもないのだけど。

はらはらと、ポロポロと落ち続ける君の涙は悲しくて、だけど君が

泣いていること以外に今の私に悲しむべきことなんてなかった。

遣り残したことや心残りが無いと言ったら嘘になるし、ひどく夢見がちな私という少女の夢はこのままなら雪のように消えてしまうの
だろう。

「私は、後悔なんてしてないよ?」

ああ、私なんてひどい女なんだろう。

最初に最後に、夢見がちな私が望んだ夢に、君が気づかなければ
いい だなんて。

10・やい、やい、あいしたひと

夢に堕ちている、その時間だけが幸せだった。

あの日あの瞬間に君の時間は止まってしまった、同時に俺の心の時間も止まってしまった。

夢の中では時間を止めてしまった君が、それ以前のように隣にいてくれて、その夢だけが俺の支えだった。

遠い昔、君の首にかかっていた冷たくて硬いそれは、あの日君によって俺へと渡された。

冷たくて硬い、小さな小さなラブレター！

小さなその小さな扉を開けても、文字なんてひとつも出てこなかった。

ただ、涙が溢れただけ。

優しい君の、最期の手の感触を思い出す。

愛しい君の、最期の愛の言葉を思い出す。

恋しい君の、この扉の中を見ていたひどく優しい・・・幸せそうな笑みを思い出す。

たくさん言いたいことがあった。
もっと伝えたいことがあった。

君としたいことが、いっぱいあった。

それでもこの小さなラブレターのおかげで、少しだけ報われる気がした。

遠く青い、空を見上げる。

君が好きだといった、俺の目と対照的な・・・その色。
きっとその色の向こうに、君はいるんだろう。

「君は、幸せでしたか？」

最期の最後に、苦笑とは違う満面の優しい笑みを浮かべた君。
それがその問いの、答えであった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1698ba/>

貴方と同じ気持ちです

2012年1月4日10時46分発行